



# 地方創生10年の節目で考える、 「〇〇下校」がある中山間地の教育のこと

OKB総研 委嘱コンサルタント

河合 達郎 氏（一般社団法人 <sup>やまなび</sup>山学 代表理事）

## 「山の中の人」を見つけ出す 効果的な質問

「〇〇下校」の文字を見て、すぐに「クマ」の2文字を当てはめた人がいたら、「もしやあなた、山の中の人ですか?」と聞いてみるといい。その人はきっと、幼少時代を山あいで過ごしたか、あるいは、いま山あいで子育てをしている人である可能性が高いだろう。

「クマ下校」とは「熊下校」のことで、文字通り、熊の出没に対処するための下校である。最近では里山に限らず、町に近い住宅街のような場所でも熊が目撃されている。小学生が教員らに付き添われて集団下校する様子もときどきニュースで目にするようになったが、それはあくまで「熊が目撃されたことに伴っての集団下校」で

あって、「熊下校」ではない。「熊下校」という極限まで凝縮された固有名詞が存在し、地域の中で浸透し、学校から保護者のスマホに送られてくる連絡にも普通に使われているというのが肝である。

私がいま住んでいる岐阜県本巢市北部の外山<sup>とやま</sup>地域は、「熊下校」がある中山間地だ。

2024年6月は、本当に「熊下校」が多い。地域内で熊の目撃情報が相次いでいて、そのたびに「熊下校」になる。もともとスクールバスで下校している子どもだけでなく、歩いて学校に通っている子どもたちも、「熊下校」となるとスクールバスか保護者のお迎えになる。「熊下校」の翌朝は、保護者が学校まで車で送り届けなければならない。

と、のっけからすでに8回も「熊下校」なるワードが登場し、「こいつはただ『熊下校』ってフレーズを言いたいだけなんじゃないか?」と思われている方もいるかもしれない。それは少しあるのだが、ちゃんと理由もある。なぜ、ここまで「熊下校」を強調するのか。それは、「熊下校」が、中山間地の子育て環境を映し出しているのではないかと考えるからだ。

## 豊かさと さみしさと 力強さと

「熊下校」から読み解く、中山間地の子育て環境。まず、この語感が示す通り、周辺に自然があふれているということだ。

5～6月にかけての夜、田んぼ周辺の水路にはゲンジボタルが舞っていた。春、地域で毎年恒例の水路掃除をしたときには、水路の中で泳ぐ幼虫をたくさん見かけた。「あんまりきれいに浚えすぎると、幼虫もカワニナもいなくなってしまう」。地域の人がそう言いながら、浚えたドブの中からホタルの幼虫と餌となるカワニナを丁寧に戻していく様子が印象的だった。そんなおかげもあってか、我が家でも、自宅玄関のすりガラスにとまって点滅する姿を家の中から眺めることができた。地域を走るローカル線・樽見鉄道の列車を貸し切りにし、車窓から天然ホタルを鑑賞する関東発



本巢市外山地域を走るローカル線・樽見鉄道

のツアーもある。今年、多くのツアー客を見かけた。

小学校の裏手には、全校児童がよく一緒になって登っている裏山がある。この小学校の伝統的な行事で、子どもたちが自然とのふれあいを通して力強さを蓄える機会になっている。夏になれば、クワガタやカミキリムシといった、子どもたちが大好きな昆虫たちが明かりの下に自ら寄ってくる。シーズン中は多くのアユ釣り師が訪れる、清流・根尾川が地域内を流れている。日常の暮らしの中でこうした自然を満喫できるということは、中山間地で育つ何よりの特典と言えるだろう。

一方で、その自然には厳しさや危険もある。熊はそのわかりやすい例だろう。地域の子たちが通学に使うバッグには熊鈴が付いている。市街地では防犯ブザーなのだろうが、こちらは「防熊」対策が不可欠なのだ。

そして、熊が近くに出る中山間地がすべからず直面しているであろう課題。それが、過疎化だ。この地域も例に漏れず、深刻さは年々増している。小学校の全校児童はいま32人（2024年6月現在）。今年度は新入生ゼロで、入学式のない春はさみしさが覆っていた。

## 中山間地の無人駅に 寺子屋を開いたわけ

私は3年前の2021年春、総務省の「地域おこし協力隊」という制度を活用し、この地域に移り住んできた。それまでは朝日新聞の記者をしていた。政治部にいた2016年1月、先輩記者

と一緒にこんな見出しの記事を書いたことがある。

「消費者庁 地方移転を明記  
政権方針 徳島へ、規模や時期調整」

「地方創生」を掲げ、東京一極集中の是正を図る安倍政権の目玉の一つ、中央省庁の移転が話題になっていたころ。永田町、霞が関の関係者にあたり、書いたのがこの記事だった。

その後、消費者庁はどうなったか。2020年8月、恒久的な拠点を徳島県に開いた。もともとは本庁機能を含む「全面移転」が念頭に置かれていたが、結果的に機能の「一部移転」にとどまった。

そして、私自身はどうなったか。2021年春、11年間務めた朝日新聞社を辞め、家族ともども、本巢市へと「全面移転」した。もちろん、消費者庁の代わりというわけではない。わけではないが、「地方が何だかさみしい

な」という思いに駆られたという意味では、通底するものがあつたのかもしれない。

協力隊活動の一つとして2022年5月から始めたのが、小中学生向けの学習支援「寺子屋シアン」だった。場所は、樽見鉄道・神海駅という無人駅の旧駅長室。なぜ、山あいの小規模校区で寺子屋を開くことにしたのか。きっかけは、小学生のお母さんの「近くに気軽に通わせられる学習塾がない」という声だった。

小規模校区であるこの中山間地に、学習塾はない。塾が十分な生徒数を見込める地域に進出することを考えれば、それは当然のことだった。周囲を見渡すと、整備された公園や駄菓子屋といった、自宅・学校以外の居場所となるようなところもないことに気が付いた。

たまたまここで生まれ育つことになった子たちが、将来「山あいの過疎地で生まれなければ……」と悔やむことのないようにしたい。勉強や大



「寺子屋シアン」は旧駅長室を活用。神海駅のホームは目の前



学進学が人生のすべてではないとはいえ、「山あいで生まれ育った」という初期条件をもって将来の選択肢が狭まることがないようにしたい。中山間地の子どもたちにとっての居場所でありながら、お互いに刺激し合っ  
て学べる場ができれば一。そんな思いで開いた寺子屋である。

寺子屋シアンは2024年6月現在、開講から2年が過ぎた。協力隊としての任期満了に伴い、2024年春からは新たに立ち上げた一般社団法人「山学」が母体となって運営している。

外山地域に隣接する、さらに山あいの学区からも子どもたちが通ってきてくれるようになった。「高校生にとってのサードプレイスもない」との声が寄せられ、高校生の学び場にもなった。違う学校の同じ学年の子同士が向き合い、刺激し、教え合っている。勉強ぎらいだという小学生が、2時間以上もカド・ケドに向き合っている。休憩時間になると、お菓子を食  
べながら学校・学年を超えて笑い合う。大学生の講師役と小学生が、ゴジラ映画を何回見たかという話で張

り合っている。

たたずまいは「過疎化にあえぐ無人駅」そのままだ。決して、映えたり、華やかだったりということはない。だが、「無人駅」という言葉に漂う寂寥感とは裏腹に、山あいで暮らす子たちによるにぎわいがある。

### 住み続けられる町？

「896の地方自治体が消滅する」というセンセーショナルなレポートが発表され、時の政権が「地方創生」を打ち出してから、2024年で丸10年が経つ。

初代地方創生担当相の石破茂氏は「スタート時の熱気が消えた」「最初の熱気のままで10年続けていたらまったく違っていったと思う」（『週刊東洋経済』2024年5月11日）。

日本創成会議座長の増田寛也氏は「（人口減少対策を狙った）施策の多くが結果として、人口という限られたパイを奪い合うゼロサムゲームに陥ってしまったことは、否めない」（『中央公論』2024年6月）。

東京一極集中の打破がかなわず、10年を振り返る声は悔恨の情が目立つ。

先に、「無人駅はきょうもにぎやかだ」と説いたわけだが、正直いえばだいぶ強がっている。樽見鉄道はこの春、ダイヤ改正により山あいの便数が減った。「高校通学にちょうどよかつた朝の便がなくなり、子どもを南の駅まで送り届けなければいけなくなってしまった」「高校生の子どもの、下校時間に合う便がなくなった。仕事帰りにしばらく時間をつぶして、学校まで迎えに行かなければならなくなった」。そんな声が聞こえてくる。ここよりさらに山あいに位置する本巢市・根尾地域ではこの春、高齢者向けのデイサービスが終了した。昨春から温泉施設の休館も続いている。

「住み続けられる町に」という、ありがちなキャッチフレーズとは反対に、子育てや医療、暮らしの環境は厳しくなっているのが実情だ。

外山地域では今春から、子ども・地域食堂「コボちゃん食堂」という取り組みも始まった。月1回程度、週末



寺子屋シアンで学ぶ子たち。かつて、地域おこし協力隊員と地域住民がサロンスペースとして改装したため、四季折々の手づくり作品が飾られている（撮影：本巢市秘書広報課）



夜、明かりのついた神海駅

に開く食堂で、みんなでランチを食べようという企画だ。さみしさを増す地域において「子どもたちの孤食を防ぎ、活性化につなげたい」という、小学校の用務員さんらの思いから誕生した。寄付金をベースにしながら、地域のお母さん方が調理をし、山学が運営を担う。6月に開いた第3回目のコボちゃん食堂の参加者は100人に迫った。こうした取り組みも、地域に対する危機感こそが突き動かしている。

## 「新生児の3割が東京圏生まれ」という時代に

「2022年に日本で生まれた子どもの数は79万9,728人。そのうち東京、神奈川、埼玉、千葉の1都3県で生まれたのは23万1,990人で全体の29.0%を占めた。およそ3人に1人が東京圏で生まれたことになる。1960年ごろは5人に1人程度、90年ごろは4人に1人程度だった」（『日本経済新聞電子版』2023年5月1日）

東京圏生まれの子が増えている。

日本全体としての人口減が確実な流れの中で、地方の隅々にまで投資をし、活性化を図ろうとするのは経済合理性に背くという論理はもちろん納得できる。いま中山間地や郡部で生まれ育つ子たちに、一人でも多く「ここで生まれてよかった」と感じてもらうことが、この先の地方創生につながっていくのではないだろうか。

もしどこかで「熊下校」を見聞きする機会があったら、ぜひ中山間地の子育て・教育環境について思いを話せてみてほしい。



### 一般社団法人 山学 代表理事 河合 達郎 氏

1987年5月3日 岐阜市生まれ  
2006年3月 岐阜県立岐阜北高等学校 卒業  
2010年3月 立命館大学国際関係学部 卒業

#### 職歴

- 株式会社朝日新聞社(2010年4月～2021年3月)
- 岐阜県本巣市地域おこし協力隊(2021年4月～2024年3月)
- フリーライター、編集者(2021年4月～現在)  
2024年3月より、朝日新聞岐阜県版でコラム「無人駅から」連載中。
- tete.(2023年5月～現在)  
いちじくの栽培／加工／販売
- 一般社団法人 山学 代表理事(2024年3月～現在)  
学習支援／地域食堂／自然体験  
ローカル線・樽見鉄道の無人駅で開く学習支援の継続に向け法人化。本巣市内の30代3人で設立。中山間地の子どもに焦点を当てた活動を展開する。



地域の集会所で開かれる「コボちゃん食堂」でランチを楽しむみなさん



調理を担うのは地域のお母さん方が中心。前日に仕込み、当日朝から作り上げる